

中濃農林事務所の普及活動状況 令和3年11月25日現在

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■農業大学生 先進農家等派遣学習状況確認

農業大学生の先進農家等派遣学習について、指導農業士等と連携しながら管内の先進農家等にて受入れを行っている。

今年は新型コロナウイルスの蔓延により開催が危ぶまれたが、例年より時期をずらして1年生は11月1日～6日に実施され、管内では畜産農家に学生1名の受入れを行っている。

11月4日、農業大学の先生とともに、受入農家を訪問し、学習の実施状況を確認した。学生は真面目に学習に取り組んでいる様子であった。受入農家からは、作業内容について丁寧に説明いただいている様子で、学校では得られない貴重な体験となっている。

農業普及課では、将来の貴重な担い手を育成する農業大学の活動を、指導農業士等と連携しながら支援していく。
(地域支援係)

■ぎふ清流GAP評価制度 農場評価

11月24日に、関市内のいちご生産者がぎふ清流GAPの農場評価を受け、農業普及課も同席した。

評価は、およそ4時間かけて、栽培記録等の書類確認、農薬保管庫等の現地確認が行われ、改善が必要な箇所については、評価員から適宜説明された。

これまで農業普及課において農業生産活動の改善支援等を行ってきたが、今回、評価員からの新たな視点での評価により、更なる気づきにつながった。

今後、農業普及課では、一次結果報告書の結果を受けて生産者が行う是正の支援を引き続き行っていく。
(地域支援係)



【ぎふ清流 GAP 農場評価】

安心で身近な「ぎふの食」づくり

■水稲（採種） 生産物審査

水稲採種ほ場の生産物審査を実施している。

10月までに5品種を終え、今月は最も生産量の多い「ハツシモ岐阜SL」の審査を行っており、籾の発芽勢および発芽率を測定し、発芽率90%以上ものを合格とする。

農業普及課では、計画に基づき、水稲採種事業補助員を活用しながら、適正に生産物審査を実施し、水稲優良種子の確保につなげていく。

(地域支援係)



【生産物審査】

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■円空さといも 生産組合総会

10月25日に、中濃里芋生産組合の総会が、JAめぐみの本店にて2年振りに対面で開催された。

総会にて、「中濃里芋生産組合」から「円空さといも生産組合」への名称変更が決定し、地元ブランドの円空さといも生産に対する意識づけを強くした。

農業普及課は、総会後の研修会で、昨年問題となった疫病発生状況調査の結果（発生なし）や、丸芋率向上のための肥料試験経過等について報告を行った。今後、肥料試験調査結果を取りまとめ、円空さといもの生産振興に活用していく。
(地域支援係)



【総会】

■ゆず 農薬実証ほの品質調査

関市上之保地域のゆずは農薬を使用せず栽培されているため、病害虫による被害を少なからず受けており、ほとんどが搾汁などの加工に利用されている。そのため、見栄えのよい果実が求められる青果需要に十分対応できていない。

そこで農業普及課では、青果販売に向けた病害虫被害の無い果実生産を目的に農薬実証ほを設け、殺菌剤3回+殺虫剤1回防除する実証区と、農薬を使用しない対照区の比較試験を行ってきた。

収穫期となった11月16日に果実品質を比較調査した結果、病害虫被害がわずかなA品規格の割合は、対照区が0%であったのに対し、実証区は14%と向上した。

今後、費用対効果を分析し、昨年度設立した「上之保ゆず研究会」に対し調査結果を情報提供する予定である。



【収穫調査】

■キウイフルーツ 豊かなむらづくり全国表彰事業賞状授与式

ほらどキウイフルーツ生産部会は、農林水産省主催の「豊かなむらづくり全国表彰事業」で、今年度農林水産大臣賞を受賞した。

11月12日、関市洞戸の「ほらどキウイプラザ」で、東海農政局長より部会長へ賞状が授与された。農福連携を始め、小学生への農業体験（受粉、収穫作業など）、後継者育成などの部会の取り組みが評価された。

J Aめぐみの中では、今年から「ほらどキウイ」を未来に残していくことを目的に、生産者、パートナー企業、関係機関で苗木を植える取り組み「ほらどキウイを未来につなごうプロジェクト」（通称「ほらプロ」）を開始している。

農業普及課では、ほらどキウイフルーツ生産部会の活動を支援するとともに、「ほらプロ」の活動も支援していく。



【賞状授与式】

■さつまいも 適切な施肥量実証圃場における収量調査

9月30日、10月20日に、さつまいもの適切な施肥量を明らかにすることを目的に設置した実証圃場（2圃場）で収量調査を実施し、蔓重や収量等の測定を行った。

実証圃場は、10a当たり施肥量が窒素成分で2kg（慣行）、4kg、6kgと異なる区を設置しており、100g以上の芋の収量は、施肥量が多くなるにつれて増える傾向がみられた。一方で、施肥量が多い区では、凸凹した芋や巨大化した芋が見られる圃場があり、芋の形質も考慮した適切な施肥量は、圃場（地力の違い）により異なっていた。

農業普及課では今後、調査結果をもとに土壌の地力窒素量を考慮した適切な施肥量の目安を示していくなど、生産者の栽培技術の向上を支援していく。



【実証圃場の収穫作業】

（地域支援係）